2013 年 1 月 19 日

随筆　福澤諭吉と私

大久保啓次郎

私が福澤諭吉に関心を持つようになったのは、2002 年 12 月に会社員としての生活にピリオドを打ってからで、それまでは学生時代に『福翁自伝』を読んだくらいで福澤諭吉には全く無関心であった。

切っ掛けは、慶應大学の友人で鴨川義塾のオーナーである椎野君に誘われて 2003 年 1 月に開塾した塾に聴講者として参加した事による。当時の講師は慶應大学時代の恩師の石坂先生であった。講演は隔月 1 回で福澤諭吉の著書が基本であった。最初のテキストは『学問のすゝめ』で毎回一編ずつ講話が行われた。

東京から鴨川までは特急で約 2 時間かかる。往復 4 時間の間、私は先生と常にご一緒させて頂いた。私の役目は先生のカバン持ちであったが、実際には何もせず、先生から福澤諭吉に関する貴重なお話を聞かせて頂いた。それが起爆剤となって福澤諭吉の世界にのめり込むようになった。

私が先生に薦められて最初に読んだ本は、杵淵信雄著『福澤諭吉と朝鮮』（彩流社）であった。今思えば、先生は最初に福澤の『文明論の概略』のような難しい本を薦めず、興味をもって福澤諭吉に入門出来る本を薦めて下さったのだと思う。確かに非常に面白く読みやすい本で、数日で読んでしまった。それから先生に薦められ古本屋で『福澤諭吉全集』21 巻を購入し、主として朝鮮問題に関連した『時事新報論集』（8 巻～16 巻）を読んで、諭吉が何故朝鮮問題に首を突っ込むようになったかを理解した。

このようにして『福澤諭吉と朝鮮』は私にはその後の福澤研究への足掛かりとなった。ある時先生は、更に福澤諭吉の思想を理解するには「福澤諭吉協会」に入会し、福澤諭吉協会の人や福澤研究センターの教授と接点を持った方が良いと言われた。そして当時の協会常務理事の西川俊作先生を紹介して下さった。

これが福澤諭吉研究への第二ステップである。

話を鴨川義塾に戻そう。私は毎回先生の講演を聞いているだけで良いものと決め込んでいた。ところが『学問のすゝめ』二編が終了した時に、先生が「次回は大久保君も勉強して皆さんの前で講話をしたらどうか」と言われ驚いた。椎野君も図に乗って「それがいい！」と言い出した。先生は「今から二ケ月もあることだし、数ページしかないのだから読めるだろう。講話の原稿が出来たら私が添削して上げるから頑張りなさい。」と言われ、私も腹を据えた。

今思うと、あの時先生のご忠告を頑なにお断りしていたら現在の自分は無いであろう。その後先生は健康を害して 2003 年～2004 年の 2 年間でリタイアー

され、2005 年～2006 年の２年間は、私が『学問のすゝめ』他を講話する事になったからである。石坂　巌先生は 2006 年 12 月 28 日にご逝去された。

石坂　巌先生亡き後は、西川俊作先生の御指導を賜り、福澤諭吉協会や涼川会で、福澤諭吉に関する勉強を続けてきた。この頃私は「福澤諭吉と勝海舟」に興味を持ち、二人に関連する書籍の読書に没頭した。『瘠我慢の説』では福澤の説に納得出来なかったので西川先生にその話をした所、先生は黙って『福澤手帳』41 号を貸して下さり、その中の 19 頁にある藤井まなみさんの『波濤』を読むように言われた。それを読んで益々「非は海舟ではなく諭吉にある」と確信するに至った。

又、富田正文著『戦争と福澤先生』からヒントを得て、「四つの戦争に対する福澤諭吉と勝海舟の態度」という小論文を書いて、西川先生に見て頂いたら、紙面が真っ赤になるくらい添削して下さり、「話としては面白いが、これはどう見ても福澤よりも勝を高く評価するものであり、福澤諭吉協会でも福澤研究センターでも受け入れ難い論文だね！」と言われた。

案の定、福澤諭吉協会が３ケ月に１度発行している『福澤手帳』に投稿したら、最初は条件付きで落とされ、次に条件をクリアーして再提出したが、結局落とされた。西川先生の予言通りになったのである。

次に「福澤諭吉と陸奥宗光」に興味を持ち、西川先生に「陸奥は日清戦争や条約改正での外交では、福澤が理想とする外交をしているにも拘らず、福澤が陸奥を評価しない理由は何ですか？」とお尋ねしたことがある。西川先生は、敢えて反論をされなかった。

私は 2010 年 1 月 28 日に涼川会（旧鈴木諒一ゼミの勉強会）で「陸奥の外交戦略に対する福澤の評価」と題して講話をする事になっていた。それで西川先生に食い下がって難問を浴びせかけていたのである。年初から 25 日までメールで遣り取りした文章が私の手元にある。先生は体調不良で苦しんでおられたにも拘らず私の質問に気持ち良くお答え下さった。

お蔭様で、慶應義塾大学のファカルティークラブの第２会議室が満席になるくらいの聴講者に対して、満足な講演が出来たと自負している。

しかし、私は西川先生を死に追いやる程、精神的に痛めつけていたのかもしれない。私の涼川会での講演の前日、即ち 1 月 27 日未明に西川先生は心臓病でご逝去されたからである。私としては誠に慙愧に堪えない気持ちであった。

お二人の先生が永眠されてからここ３年間は、未だ現役の小室正紀先生や平山　洋先生のご指導を頂き福澤諭吉の勉強に専念してきた。

この 10 年間には、『学問のすゝめ』『文明論の概略』『民間経済録』『実業論』『丁丑公論』『瘠我慢の説』『日本婦人論』『日本男子論』『通俗外交論』『帝室論』『民情一新』『時事小言』『福翁百話』『福翁自伝』『時事新報論集』等々、様々

な著作を読んで勉強し、幕末～明治維新での福澤諭吉の功績について、既述の先生方にご指導を賜り、福澤諭吉に関する知識を深めてきた。

このような状況下にあって、最近気になって念頭から離れぬ事が一つある。開闢以来続いてきた「権力の偏重」の影響による日本人（国）の主体性である。「一身独立して一国独立する」は福澤諭吉の理念である。国民の独立には二形態あり、ひとつは経済的独立であり、もうひとつは精神的独立である。

経済的独立とは、衣食住に困らないことを言う。

精神的独立とは「社会の交際、処世法において、自分の思う事を言い、自分の思う事を行動に移し、秋毫の微も節を屈する事なき事を言う。」『福翁百余話』つまり主体性ある発言や行動が出来る事を言う。

国の独立にも二形態ある。経済的独立と精神的独立である。

経済的独立とは、その国の経済力であり、精神的独立とは、その国の外交力である。図示すると下記の通りである。

国民の独立 ➡有形の独立＝経済的独立（豊富な衣食住）
↓ ➡無形の独立＝精神的独立（人間交際に於ける主体性）
国の独立 ➡経済的独立（経済力）及び精神的独立（外国交際に於ける外交力）

確かに現在は、日本人及び日本国は経済的には独立している。しかし精神的には独立していると言えるだろうか。

「日本の人間交際は、開闢以来至大より至小に至るまで、交際の定則に従って「権力の偏重」を成し、常に人に屈するを以って恥とせず。今日に至るまでもその勢いを変じたる事なし。」と福澤は『文明論の概略』で述べている。

明治元年から今日まで約 150 年経過して、現在では日本人の間での交際に於いて「権力の偏重」の影響は少ないと思うが、外国人との交際に於いては、開闢以来の「権力の偏重」の影響が大であるように思えるのである。

完